

財団法人京都国際文化協会  
第34回(2011年度)エッセーコンテスト  
《私の見た日本と世界》

**形のない日本の文化**

**ヨカ・サーニャ**



電灯、ネオンサイン、煌きのモザイクへと着陸している。終わりが見えない、真夜中の色彩の巨大な海だ。ここは、何百万人も留めている日本の首都で、私も何年か住んでいる。帰ってくる度に、ため息をつかずにいられない。

日本は、世界中で感心される文化が生まれた国だ。武士道、生け花、茶道、歌舞伎、書道などが深い底に根付き、これらは道徳や美を表現する日本の文化の表われだ。私もこれらに心を惹かれて、日本の心を探るために、留学に来た。

しかし、何年か日本に住んでみると、現代日本は、この立派な文化から離れてしまっているように思い始めたのだ。最近、若者同士の話が耳に入ると、買い物、食べ物と噂話ぐらいだ。国の将来の力になる若者だから、何か違うテーマでも考えた方が良くはないか、と思ってしまう。日本ではあらゆる物が売れ、技術も発展し、生活は便利になっている。日本人は食とブランドに敏感で、各国の食べ物を楽しんだり、高級なバックや服を持つたりすることを大事にしている。週末になると、おしゃれな店やレストランが陽気なお客さんであふれる。それでも、日本人は「私たちはお金がない」と言っている。このような話を聞くと、戦争や飢餓に苦しんでいる人々のことを考え、心が痛くなる。あの立派な文化はどこに行ってしまったのか。現代日本では物と金以外に崇めるものがあるのか、と疑い始めるのだ。日本は単なる消費社会になってしまったのか。

私は、非常に悲しい出来事をきっかけに、答えを見つけることができた。今年の3月11日は、東京がそれほど素敵な姿を見せたことのない、晴れた日だった。家に帰り、パソコンをつけると、「また地震か」と、揺れを感じた。そのうち静まると思い、パソコンをし続けたのだが、静まるどころか、更に激しくなっていく。そして、部屋にあるものが散らかっていく。家全体が何度も揺れていく。私は、机の下に隠れながら震えていた。これは、日本人でも体験したことのない、未曾有の大地震だった。恐怖で家を出て、渋谷まで歩いた。

その混乱した状況の中、日本人の反応はどうだったのか。電車は完全に動かず、いつ動くか分からない。電話もほとんど繋がらない。しかし、家に帰れなくなった人が多いのに、パニックの気配がいつさいない。不満を言ったりする人もいない。改札口の前で、皆列を作って冷静に待っている。これから何が起こるか分からないし、家族の心配もあるだろう。私の国だったら、きっと大混乱になったに違いないが、そして、混乱を利用し、物を盗んだり、暴力を振ったりする人もいない。

家に帰り、テレビをつけると、地震より怖ろしいニュースが伝わってきた。海の方から巨大な波が上がってきて、いくつかの地域を飲みこみ、何万人もの命を奪ってしまった。波といっても、海全体が大陸に上がり、戻っていく。大きな船をマッチの箱のよう流していく。車も、建物も。さっきまで親と手をつないでいた子も流していく。まるで映画の中のように、神様は一体何を考えたかと、胸が苦しくなる。

更に、原発の事故と放射能の恐れ。

水道水に放射物が検出され、水を買うのが困難になった。一人にボトル一本という制限になったが、日本人は、店員がいない店で一人分の水を取り、レジにお金を残していく。誰も一人分以上取ろうとしない。誰も物を盗もうとしない。こんな映像がいくつも外国で流れ、故郷の友達からも、本当なのかという連絡が来る。確かに、外国から見ると、店員がいない店で認められた以上の物が取られなかったり、盗まれなかったりすることは意外に見えるが、日本では当たり前の行為だった。

何日か経っても、状況が落ち着かない。日本人の友人から電話が来た。

「サーニャ、危ないから、早くセルビアに帰った方がいいよ」

「セルビアに帰るって、もう日本に戻れないってこと？」

「それは何とも言えないけど、日本はこれからどうなるか分からないから、早くセルビアに帰りなさい」

私は帰る所があるが、行く所がない友人が私の安全を考えてくれた。

「でも、入学の手続きがあるから、帰ることができない」と言ったら、

「それは、私がしてあげるから、心配することはないよ」と言う。

だが、電車が動かないので、空港まで行けない。大使館に連絡したり、バスの予約をしようとしたりするが、何の情報ももらえない。空港まで行けなかったら、航空券が無駄になる。タクシーで行こうと思っても、何万円もするし、運転手が長距離の運転を受け入れない。心配している親の泣き声に対して何とも答えられない。そこで、同じ日に飛ぶはずのスロバキアの友人から電話が来た。彼女は怖すぎて、ずっと日本人の友人の家に泊まっていた。私と同様、空港まで行けないが、その友人が私たち二人を、空港まで車で送ってくれると言う。

東京はまだ余震で揺れているし、放射能の恐れもある。屋内退避を促がす情報もある。更に、大きな地震が東京の方にも来る噂がある。とにかく、怖い。それでも、友人は自分の安全を考えるより、私たちを空港まで送ってくれることにした。いくら感謝したくても、感謝しきれない。

「いえいえ」、その友人が穏やかな表情で言う。

「私は、この大変な震災を見て、何か手伝ってあげたい気持ちになったんだ。でも、私は今、被害を受けた人の為に、何もしてあげることができない。二人を空港まで連れて行くのは、私がこんな状況の中で唯一貢献できることだ。二人の話が楽しかったし、これも一つの縁でしょう」

その二ヵ月後、東京で大事な日本の友人との幸せな再会。友人が被災地の石巻でボランティア活動をしてきた。帰国している間、日本のニュースばかり聞いていて、何もする気がなくなり、一ヵ月落ち込んでいたことについて話してみる。

「分かるよ、サーニャ。私も落ち込んでたの。でも、ボランティアをしてから元気になったよ。被災地の人は元気だから、私も元気になったよ」と友人が言う。

本当に津波で被害を受けた人は元気なのか。だって、衝撃から立ち直るのに時間がかかるし、家や最愛の人を奪われた人が多いだろう。そして、原発の事故は解決されず、放射能の恐れはまだある。

「そう。だけど、皆元気。津波は大変だったみたいだけど、その後、皆復興ができるように頑張ってるよ。そして、ボランティアが来るのを感謝している。皆前向きで、明るいよ。だから、私たちも元気でいなきゃ」

やはり、現代日本は単なる消費社会ではない。文化というのは、人間が築いて、人間が抱いていくものだ。文化には、形があって、手で触ることができる側面もあれば、手で触ることができない側面もある。人間の行動や考え方、心や道徳というのは、その手で触ることができない文化の側面だ。人間は、苦しんでいる時こそ、真の心を見せることがある。日本は悲しい震災に接し、精神面の文化の表れとして、素晴らしい姿を見せたのだ。このように、日本には未だに深い底があることが分かった。

大変なことがあっても、冷静に行動すること。

自分さえよければいいのではなく、いつも他人も思いやること。

人の気持ちを理解し、友情を大事にすること。

助け合うこと。

何よりも、負けずに、将来に向かって頑張っていくこと。

日本の文化は、これからも煌きを増すに違いないだろう。